

私のリアリズム

(11)

——自伝風——

松永浩介

活したのは敗戦の翌年
二十一年である。
私は十一年四月に根
岸春江と結婚した。根
岸と識りあつたのは、
日本楽器横浜工場で
「全協」のキャップをや
つていた田沢太郎吉が

前回、「二、二六」事件のことにふれた
が、二月二十六日午後八時すぎに簡単な陸軍
省発表があり、ラジオ、新聞号外によつて国
民ははじめて事件の勃発を知らされたが、そ
の後も軍発表以外の報道はすべて禁止され、
二十八日にいたつて数百の部隊が騒擾に加わ
つたことが明らかにされた。と「昭和史」
にあるから、私が「事件」を知つたのは、二
十六日の夜か翌朝であつたらう。二十七日に
東京市に戒厳令が布告された。事態が重大な
ものであることがわかつてきて、そのシヨッ
クは大きかつた。「芸術クラブ」が二月二十
四日発行（通巻四号）で休刊となつたのはこ
うした状況から先行きの見透しが暗いことを
考えたためであつた。三月二十四日、内務省
今年のメーデー禁止を通告（三十七年も禁止
三十八年以後は引続き禁止）・メーデーが復

検挙され、その救援運動の会合が始まりであ
る。根岸は小学校の高等科を二年で中途退学
して生命保険会社の給仕となり、女子商業専
修夜間部に通学、関東大地震で横浜生命をや
め卒業後、左右田銀行に入社。Y M C A 英語
学校に入社、英文科修了後タイプライター科
に学び修了、間もなく左右田銀行がパニック
で破産、昭和二年（十九才）山下町のイギリ
ス系「ベック貿易商会」にタイピストとして
入社、傍ら洋画の勉強をしていた。二十才の
時に母を失い、父と二人の妹と十才の弟のめ
んどろをみる立場にあつた。クリスチャンか
ら脱出してマルクス主義に辿りついた過程に
はそうした生活体験が積み重ねられてきたの
である。その半面にクリスチャンとしての自
己探求精神が合わさつていて、左翼の文献を
かじつて得々と理論をひけらかすといつた、

その頃よく見かけたエンゲルスガールとは違
つていた。エスペラント語も学び、その後、
家庭の人となつた時の副業として家計をたす
けるという目的をもって肖像画研究所へも通
うという努力と向上心の並々ならぬものを示
している。結婚の前年に独居して画に専心し
たいからといつて、下宿先を頼まれた私は家
の近くに知り合いの二階があつたのでそこを
紹介した。そこに移り住んだ一年三ヶ月は家
族への気がねもなく、交友も自由にふるまへ
て文学・芸術論等も活発に交わされたようであ
る。私の作品に対する感想もよく話してく
れた。組織がなくなつて、かつての仲間はち
りちりばらばらになつていた時にこの下宿は
恰好な語り場になつた。根岸との結婚には若
干の曲折があつた。といふのは私には自分で
恋人だとひとり決めつけていたTという女性が
いた。Tは父を早く失つて、古着商をやつて
いる母と和服の仕立物をやつていた。近くの
娘を三四人教えながら細々とくらしていたの
である。私のおやじが古道具屋をやつており、
Tの母が商売で時折り立ち寄つていた。そん
な関係でTの家の（借家）台所の修理仕事を
頼まれたある時、午めしのために私が水道で
手を洗おうとしたらTが手ぬぐいと石けんを

差出してくれたのである。仕立屋に年期奉公
してきたTにしてみれば師匠からそういうサ
ービス精神を教えこまれており、日常それを
行つてきたあたりまえの所作であつたらうが、
十九才で母親を失くした私は女つ気のない生
活をしていたのでTの行為を感激して受けた
のである。それがきっかけとなつて当時読み
始めた文学書（吉田絃次郎・正木不如丘、石
川啄木、戦旗、文芸戦線等）をTに読め読め
と押しつけたのである。そしてある時、「何時
か大工として一人前になつたら求婚するよ」
といつたのである。Tはその時笑つてうなず
いてくれたと私は思い込み、ひとり合点した
のである。それから一年に一度か二度、活動
写真をみに行く程度の交際で手を握つたこと
もなく、四年が過ぎた。その間に根岸との交
友が深まるにつれて私の内部に変化が起り始
めていた。「学」のない私は根岸のもつてい
る教養に惹かれていた。然し結婚する相手と
するには少しひらきがある。第一、根岸が私
に愛を感じているかどうかさえもんである。
Tとのプラトニックな愛を結婚に持ち込まな
くてはならない。そう思つて私は長文の手紙
を書いて結婚の確答を求めた。返事は然し全
く裏目に出た。Tには結婚の意志が全くない

のである。プラトニックとはこつちの思い込
みに過ぎなくて、Tの方では私は今というポ
ーイフレンドに過ぎなかつたのである。「別
れよう。世間の誤解を招かないうちに。お互
いがきれいなうちに別れよう」そんなせりふ
をいつて別れたように憶えている。その当座、
私は好きでもない酒なんか喰つて歩き廻つて
いた。それまで「俺にはTという彼女がある」と
いつて仲間には吹ちやうしてはいたのだから全く型
なしてあつた。長者町五丁目あたりに「きつ
ね」という呑み屋があつた。経営者は角力常
設館の活動弁士で名の通つた中川清で、そこ
の看板娘と岡野春次が恋愛中で岡野と同居し
ていた高橋正治もその常連になつていた。
斉藤ピアノのグループもよく顔をみせていた。
そこに「杉ちゃん」という女給がいた。小柄
で美人というほどではないが可愛い顔立の
娘であつた。彼女は私の失恋に同情して好意
を示してくれたが私にはそれを受け入れるだ
けの心の余裕がなかつた。

何月であつたか忘れたが、その頃付けてい
た日記を出して根岸に求婚した。日記を読ん
で私への理解が不十分であつたことを覚つた
のと、根岸自身の中にあつた恋愛上の問題が
清算しきれないでいたために返事は延ばされ
たがやがて承諾してくれた。日記をみてTの
ことを知つた根岸がその時「その方は気の毒
ですわね」と洩らしたが、その思い遣りのこと
ばを私は今も忘れないでいる。
私達の結婚については友人の多くが危惧を
もつていた。叩き大工と英文タイピスト、こ
の取合せは当時としては考えにくいケースであ
る。永つづきはしまいというのが彼等の心
中での予感ではなかつたかと思う。私自身と
しても絶対的な自信がある訳ではなかつたが
當つて砕けるといつた気持ちであつたことは
否めない。結婚式はいわゆる「引越結婚」で
ある。南大田町の横浜高商（現横浜市大）の
坂の途中にあつた家を借りてそこへ荷物を運
んでおいて、土曜日に勤め先を休んで式をあ
げた。仲人は根岸の友人の森崎さんの両親に
お願いした。双方の親と兄弟を呼んで手造り
の料理でささやかに済ませ、翌日曜は整頓、
月曜日には平常通りの顔で御出勤するといつ
たあんばいで、近所へは引越のあいさつだけ
ですます。それから一週後の日曜に友人達を
招いて披露した。新婚旅行なんてのはブルジ
ョワ階級のやることで、自分達のこの形式は
現実的で新しいのだと自負をもつていた。私
は後に再婚した時もこの方法でやつている。

意気込んで始めた新しい生活は然し長く続かなかつた。五月に妻の叔母が死に、夏頃になって妻の疲労が目立つようになった。画の勉強も思うにまかせず焦りが感じられるようになった。そんなある日叔母の死を悼んだ短歌が四首、メモに書き止めてあったのを発見して自分の本名をとり「泉 春江」として「文学案内」に投稿してそしらぬ顔をしていた。「文学案内」の九月号に佳作としてその四首が掲載されているのを知り短歌を学び始めた。十月に喀血、十二月に中里の新築された貸家に引越、十二年一月会社に出勤発熱あり二月退社、三月東京日日新聞の随筆欄の島木健作の「ある漢方医のこと」を読んで早速問い合わせたら島木氏から親切な返事をもたらし五月頃に札幌に治療を受けに行く予定だったが四月になって病状悪化、友人のすすめで久保山の「横浜療養院」に入院した。根岸が短歌をやるようになってからその勉強に何かと協力するようになり私は詩からはなれていった。横浜の「短歌評論」グループと識り合ったのもそれからである。三月の支部の会合に二人で始めて出席したがその時のメンバーは山笠草平・佐藤吉之助・武政社郎・紀太善助の五人である。場所は本牧の「御影堂」という墓守

りをやっている武政社郎のところであった。東京から渡辺順三さんが来るというので出席したのだが当日は午前中雨がふって渡辺さんは見えられなかつた。「文学案内」は四月で廃刊されていて「短歌評論」だけが残された唯一の発表誌になっていたのである。根岸が入院して間もなく斉藤ピアノで問題が起きた。六人ばかりいた徒弟が結束して待遇改善と賃銀引上げ、を要求したのである。要求が入られなければ工場をやめて各自が家に帰るといふのである。おどろいたのは工場側より職工のわれわれであった。徒弟は工場の隅にある寄宿舎で起居し、食事は工場で支給するのである。ある時、夕食のおかずが馬肉の煮付が出された。それがひどく臭いで誰も喰べないでゴミ箱に捨てたのをたまた社長奥さんがみつつけ、「もったいないことをする」といって女中に命じてそれを拾い出させ、それを煮直して又翌日また出させたのである。勿論だれも喰べないで捨てた。くさった馬肉を喰わせるというだけの問題で徒弟達は怒ったのではなかつた。徒弟のOに好意をもっている女中から彼がきき出したところによれば、その肉は社長が「鞆丸炎」をわざわざつけてその熱をさますために使った馬

肉であることがわかつたのである。くさくて喰えないで捨てた肉をごみ箱から拾い出させて煮直して又出させた社長の奥さんは前に小学校の教員をしていたのである。徒弟達が憤激するのは当然である。然し社長はその非を認めようとせず、徒弟達の要求をつっぱねたのである。(つづく)

「コスモス雑記」について

コスモスの面白いところといえば「雑記」だろう、とは昔からよくいわれたが、古いのを今読み返して見ても、それほど持長があるとは思えない。この十九号などの方がはるかにバラエティに富んでいると私は思った。今回から編集に当たってのことは楽しみの一である。ここは何でも書いていい場所だから、同人の素顔を遠慮なくさらけ出して欲しい。しかし当分のうち現在の十五字詰三段分(75行)の限度を忘れずに皆でワンサワンサと勝手な音をあげたいものです。

プロレタリア詩の

概念を変えられるか

高島 洋

次の意見は秋山清が福田和夫詩集「名前を呼ぶ」のために批評的あとがきとしてかかれたものの全文である。

「解釈がこんなにちがうものだろうかと思つた。詩とは、という議論ばかりでなく、現在今日ただいま、同じ地球の上、同じ日本という狭い土地にいて、福田君とぼくとは、別なものを見、別な空気を吸っているのかも知れないとおもうほど、この詩稿を読んだときそう感じた。そして二度、三度とよみかえしているうちに、最初の思はずこしずつ消えるようだった。私の気づかぬこと、見てもいないことに彼の注目が向かつていたとしても、自分をいとしむ思いで共通しているんだ、と考えを改めること

ができた。私は自分で解釈のつかないものを描こうとはしなかつたが、その狭さに気がついてきた。必ずしも何もかもに自分の解釈が行きわたるといふことこそ途方もないことである。そのことを改めてこの詩稿を読みながら自戒する自分を感じた。福田君のおかげで私は自分をもう一度、出発の日の謙虚に戻したいときえ考えはじめた。福田君と私の詩のもつ世界は表面はずいぶん離れて見えるが、そうではないと私のどこかそう思いはじめているのだ。「蛍光灯」といふ詩のなかに

いつも蛍光灯をともしてきた
思い当るのはこんな単純な事実である
という言葉がある。このようなものが私に欠けていた。

わたしは秋山氏のこの意見をよんで表現の仕方が大胆で巧妙であると感じた。じつは私も福田和夫詩集に新鮮な感じをうけていたのであるが、それはそれとして、このあとがきをよみながら面白いシヨックをうけていた。秋山氏が「アナキズム詩集」を編集後、その作品について疑問をもっていることは、その後の発言で大よそはうかがい知ることではできていた。自分自身の詩にも疑問をもち、自分

の詩をも変えようとしているのではないかと推察していた。従つてそういう秋山氏の最近の詩に対する考え方と先程のあとがきとは無縁ではないとわたしは理解する。けれどもあとがきの意味するものは、至極正論であり(但し秋山清の詩と福田和夫の詩の近接度はまだ不分明)あるいはプロレタリア詩を新しい方向に位置づけするものではないかとおもいながらも、一方ではプロレタリア詩の範疇はどうなるのかという疑問もあつた。そして次にはプロレタリア詩の範疇などというケチな問題はいつでもよいではないかとおもつたりもした。それよりも私自身、プロレタリア詩の範疇などという発想で過去のプロレタリア詩のなかの一つの傾向に執着しているのではないかということの方がより問題であつた。それともプロレタリア詩は過去のものであつて今日ではそのようなジャンルを必要としない現状にまできているのであろうかとおもつてみた。そういうことを考えている最中に大阪から森上多郎詩集「凍つた場所」が送られてきた。著者の考えはわからないけれども、私はこの詩集をプロレタリア詩だとおもつた。それはプロレタリア詩のなかで今迄になかつた一つの位置をしめるものではないか

ともおもった。それはなぜか、森上氏が阪急電鉄労組の委員長であることとなんの関係もない。むしろ彼があどがきにかいていることにある。

「政治的にも思想的にもこの十年がいかに大切であったかということは身にしみてわかる。政治的に混乱した事件も多かったが、それがどうして混乱するのか。それをどう理解するのか。思想的な流れといったことについてもなかなかつかみ切れなかった。その変化にもついてゆけなかった。なによりも自分の確かな眼をもたなくてはならないということも忘れていた。そのことに気がついたのはやがと最近のことである。また今迄私は詩における感覚といったことを考えてきた。詩を感覚的にとらえることで現実状況との対応をはかるといったことである」とのべており作品「ある歴史」を紹介すると

「顔の中のボキヤブラリーが／わめきだす／眼は眼のように／鼻は鼻のように／口は口のように／すると／そいつは錯乱して／階級的ということばしかいえなかった／それから／何年かたつて／階級的ということばが聞えない／奇病が流行した／それに感染したそいつは／一日熱でうなされて／

ついに／起きあがれなくなった」
わたしは秋山氏のあとがきの意見や、森上氏の作品傾向などに、今迄のプロレタリア詩の概念を変えてゆく何かがあるのではないかという期待をもつものである。

管理される

職場の詩人

木原 実

このごろ職場のなかで詩を書いたり、サークル活動をしている人たちに対する圧力や攻撃がまたひどくなっている。

ある職場の婦人は、総評文学賞の詩部門の賞をうけ、詩集をだしたとたんに、本社の企画事務に配置転換になった。表面は何ということもない、現場から「本社へ上った」形だが、直接管理者の監視下において、仕事の意味は、彼女が詩のテーマとしてもしばしばと

りあげ、反対してきた合理化をすすめる側の事務を担当させられることになった。「ひどいんです。毎日が精神的な拷問なんですよね」と、彼女はわたしに語った。

大きな民間企業にいるO君は、かれの詩人としての活動が社内では知られるようになって、これまた現場づとめから本社の渉外部門に「抜擢」され、毎晩のように接待の酒びたりの環境におかれた。内向的な青年で、おまけに酒も人並みにのめないO君にとつて、これはまた神経を無茶苦茶にしてしまう責苦である。地方の鉄道につとめるH君はサークルのリーダーでもあるが、常習の配転受難者で、一年ごとに勤務地をかえられる。「一生、各駅停車ですよ」と、いう。

ある製鉄所のサークルの十人ほどがハイキングに行った。つぎの日にはそのときの写真がもう職場長の手もとにあつて、参加した一人が根ざり葉ざり様子をきかれた。その製鉄所では、職場長はその仕事の班内では絶対的な権限をもっている末端管理者だ。

職場の詩人にたいする企業側の管理政策は、きめがこまかく個別的で、異端封じこめのようなやりかたがめだつ。それも不当労働行為といつて騒がれたり、反撃されたりするよう

挽歌

秋山 清

彼が死んで一ヶ月。

明るいこえの女の子と連立つていった。

ラグビーを見に。

明日はさくだらう辛夷の木の下を通つて。

ラグビーの試合は近く見ると

あらあらしくなまぐさくてじつにいい。

応援のこえを立てていると

誰かオレンジを切つてどつきりくれた。

それをかじりながら

乳白色にはれた午後の太陽がやさしかった。

彼がつとめていたことのある

撮影所の近くの多摩川グラウンド。

ベースボール、サッカー、ラグビー用なし。

毎晩 好きで、飲んで、死んだ。

(一九七八・三)

なへまはしない。それでいて管理者側は、詩人の書くものの傾向などをよく知つていて、職場のなかで監視し、隔離し、封じこめてしまふというやりかただ。なかには、職場で人と話をしたり接触したりすることができないようなところにまわしたりする。

当の詩人たちはいらだち、あせる。それをどこかでニヤニヤして見ている目があるとおもうと、抑えようのない怒りがこみあげる。「詩を書いて、そのために闘うということが、骨身を削ることだとだんだんわかってきました」と、他の職場の詩人がわたしに言った。

企業の中の異端の選別と刈り取り、圧迫と孤立化などは、この不況下の合理化攻勢と別のものでないだろう。しかしそれよりも何よりも、企業の中の人間管理が、マンツウマンで徹底し、ひとりの労働者の全人的な態様が洗われ、摘出され管理されているという、企業による人間管理の恐ろしい進行ぶりだ。職場の詩人への管理強化もその一つのあらわれにほかならない。ひとりひとりの労働者の身上はもとより、その性格や思想傾向や交遊や生活行動のパターンなどが細部にいたるまでしらべられ、管理の対象になる。酒屋

るといつて嘆く労働者もある。

ひとりひとりの労働者の人格と生活の全態様が計量化され、管理されるというなかにあつて、詩人であるということはどういうことであるのか。職場の詩人たちは、管理されながらこれに抗する。まさに「骨身を削る」たかかになりざるをえないのだが、その職場詩人たちが直面している問題とたかかいは、高度な資本主義社会の、いまの時代の根底に横たわる、もっとも本質的な問題につながっている。それは現代社会のやがてくるものへのさきふれでもある。そのことはすべての詩人が、現代という時代を追及する上で、十分に心しておいてよいことである。「戦争中は、人びとは人間にしか用がなかった、(そこに詩人がいたので)、人びとは詩人にしか用がなかった」。ポール・エリュアールが、第二次世界大戦のあとで、そんなふうに語つたことがある。

職場の詩人たちの直面している問題の深さは、ふたたび人びとが、「人間にしか用がない」、「詩人にしか用がない」という時代が、すでにじまつていていることを、痛切に思い知らせるものがある。

山あいの部落

緒方宗平

銀杏

あともうないと誰れが保証しよう。

1977. 11. 20

三〇年も
そのうえも
地中深く埋って
なお生きている。
高速道路工事現場で
ブルトザーの鼻さきによつきとでてきたやつ。
あの部落のどのあたりだろうか、
不発弾がでてきたというのは。
私は山あいのその道を通ったことがある。
松と雑木が繁り
ネズミモチが黒い実をつけていた。
まばらな家
落葉した柿の木
ひなびた日本の風景であった。
なにも知らなかったのだ。
ジーンズ論議などもあり
日常の生活のなかにつきまとうアメリカ。
忘れるはずもない
もう一つのアメリカの顔。

冬もなかばの
午后も三時をすぎたろうか、
木立のなかの寺は
土塀の外のハゼの梢に
百舌が叫んでいて
寒むぎむとしていた。
兵舎になったその寺を
空襲は焼きつくした。
火の粉を浴びて生きぬいた
庭の銀杏は
亭々として
三〇余年の重みを伝えている。
金いろに包まれた樹姿が
晴れた空のいろに
くつきりと浮んでいた。
その樹肌には
消ゆることのない火傷のあとがあるはずだ。
風はどこかに去ったらしい
音もなくふりそそぐ落葉をのこして。

1977. 12. 3

深海魚

河合俊郎

伊良湖の岬から雲がちぎれとんできては去り
風は音もなく砂を吹きあげ吹きあげ
蔓荆の葉を鳴らしている
海が白く裂けてしづく夕暮
波打際にじつと手をひたして潮流をさぐる
遠いくらい海底を深海魚が移行する

東へお行きなさい
水面の冷たさを破って大型タンカーがすべり
黒いでつかい影が二〇〇海里の底をよぎると
海はいっ時星が点滅するようにざわめき
貝たちまで潮吹きをはじめ

不信が沈む砂の層を深海魚が移行する
美しいものはなにもない海底の闇を
失なわれたものいつさいが落下する潮層を
けんめいにあがきあがき
ああ 深海魚は移行する

西をごらん
紀伊の山山は紫にけむり
水平線は淡紅に やがて真紅ににじみ
夜とおしのおののきと疲労が待つ海底を
すさまじく深海魚は移行する

(一九七八・三・二九)

病院の庭

暮尾 淳

舞う
花びらを
青い顔でながめながら
病人が付んでいる
中庭で
洗濯物が乾き
藤もよりの寝巻が一枚
風にゆれていたが
窓枠から
のけぞるように鳩が飛び立ち
眠りにおちて
夢からさめると
静かな朝の
誰もいない庭に

雨が降り
水たまりに花びらがあふれ
見覚えあるあの
寝巻が
物干の紐に
それでもしどけなくからんでいたが
それから何日も雨は降りつづけ
しだいにそれがよじれて
太い綱のようになり
濡れそぼったその
重さで
一人の死がぶらさがっているのを
ぼくはみつめていた。

生きてるやつは

小野 十三郎

生きてるやつは
眠っているときも
まぶたの中に
物象がありありしている。
おれもいまそうだ。
夜目にもしるく、山が森が川が見える。
そんな道を迷い歩いて
いまいるのはどこかの半島のとつばなだ。
電照菊を栽培するビニールハウスの白い屋根が
海ぎわまで陽に映えている。
その一つのトンネルの中にいて

天井までとどく大輪の真黄な菊をおれはいま見てい
る。
紫の蘭もあつてどぎつい光彩を放っている。
妙なところにいるとはおもわない。
これは夢だとも。
死者がいまいるところは知らない。
生きてるやつは
眠っているときも
世界は隅から隅まで煌々としている。
そして呼吸やすらかに
寝返りも打たず。

乾湿記

伊藤正斉

○

このなかは
一日中乾ききまっている。
二つのガス窯と
二つの電気窯。
その上をしづかに乾燥機がまわっている。
熱気のチリが河のように流れている。
窯の火は一年中絶えることはない。
むかしは野焼。穴窯。のぼり窯。石炭窯。
今は重油。ガス。電気窯。
不景気といえ

焼物と織物がいちばん先にくる。

尾張瀬戸、一宮。

不況のたびに職人たちは土方に出かけた。

公共事業といってもいろいろある。

道路。河川。建築。

わけても土方仕事。

むかしも今もかわらない。

日本列島どこまでいっても工事中の立坎パン。

道路はいたるところ遮断されている。

○

テレビで織機を大ハンマーでたたきこわしているところ
ろがうつる。
高度成長の終りの絵である。
戦争中、
陶窯の煙突のアンゲルを
軍が全部こわしてもつていつてしまった。
林のように立っていた煙突が消えて
空がきれいになったときがあった。
今
そうたやすく火をたやすわけにはゆかぬ。

どの家も 自家用車を持ち、
テレビ、冷蔵庫、ステレオをもっているからというわけ
けではないぞ。
自在にしめり、
自在にかわく、
そんな時間があるというのか。
マッチをすれば
自然に
爆発はおこる。

・乾く

○
ロクロの回っている陶房。
湿った下口の匂いがする。
ドロのついたひざがしらと
ドロのついたくちびるは
なにもしゃべらない。
二つに折った体をふかくまげて
手だけが魔物のようにうごく。
窓の風とおしをよくするわけにはゆかぬ。

ロクロは遠いむかしから回っている。
回らぬときは不幸なときだけだ。
ロクロは一日中回っている。
夜おそくまで回っている。
ロクロの中心から伸びてくる土は
いつも夢をみている。
一日一日があんまりみじめだから。
陶房の梁で首をくくって死んだ老婆。

ロクロの上で作る姿勢のまま死んでいた先代。
それは焼きもの屋のおいむかしの
みじめなはなしか。
陶芸。

手仕事。

などというブームの

風とおしの悪い窓に

自作の風鈴など吊して

ロクロは回る。

・湿る

老醜慘々

内田 博

シャッター閉し

看板の灯消えた店のならびは
ひっそりとしたうすぐらさだ。

しかしどうして

おれがこんな場所を歩いているのか。

おれたちの

これが追悼、

うたえ 飲めと

涙流しわめいていた老人がいた。

それからどうした

どうもしないさ

あの店を出てわかれたのだ。

三

玄関前

小雨のなかにあいつは付っていた。

赤旗、取ってくれるとこ

なかでつしまか。

日曜版でもとあいつは言った。

ない、とおれは答えた。

ああとあいつは雨ぞら見あげるようにした。

家人中

いっばいハタ積んでいるとも言った。

一

銀座商店街

浅草街

有楽町などの

本来のそれではない町名は

にっぽんの大都市

どこにでもある

へり下りおかしな

源氏名？のようなもんだ。

二

酔眼ぼんやり

そのくせすべてが見えてもいた。

そうだった

このあたり一帯、

銀座商店街は木曜定休

すると今日は木曜日か。

いよいよもなく

むかむかっとした。

すこし濡らした新聞を

あいつはポケットにつきこんでいた。

あれはきのうの朝だったか

おとといの朝だったか。

四

ずつとさきの方

かけ廻る犬どものすがたが

ちらちらする。

あれはどこまでもそうなのか

腐り、くずれおちる時まで

それからまた

二、三の通俗評論家などがといいだすのか。

つんのめる足のしたが

波になる。

五

つぎつぎに人が死ぬ

致し方なし

まこと光陰矢のごとし

ざわざわとして日がすぎる。

模様舗道

人影なし

つめたい風が吹きぬける。

ふらふら歩いているのは

ほんとうに俺か。

墜落とか 陥没とか

滅亡とか

骨かた

追悼詩など書くもんかなどと

つぶやいていた。

六

あの明るさは映画館のならびだ。

きらきら光るのは

三月九日 夜の小雨だ。

あそこを曲れば

ゼニなし からだなし

おれに用なし有楽町だ。

ふらふら歩いているのは俺ではない。

ほんとうのおれはペタっとなつて

おとろえの寝息もかすか

あのくらがりに眠っているのだ。

——夜の街

詩人の死

野口清子

いないのです
すでに あなたは。
眼をかるくとし
うつつらと唇を開いているけれど
もはや語ることはない
言葉が

あなたが
あなたの肉体をはなれ
ながかつた病と 闘いの日々から
解放され
無限大世界に向って
歩きははじめたのです。

そのときから
あなたの言葉
あなたの詩について
人々は果てしなく語りはじめ
論議し
うたいはじめたのです。

人民詩精神

【戦争中日本の詩人の多くは軍国主義、国粹主義を振りまわし、敗戦後は猫の杓子も民主主義——その間にあって私たち(注・コスモス同人)は一貫してかわりなき人民詩精神の発動を意欲するものである。】という本誌創刊に際しての意見は当時ひろく知られ、それから三十年、この主張は今も少しも死んでいない。だが何となく人民詩精神という語には今日すこし古びが感じられるようだ。ここになかなか大きな問題がある。

あの敗戦のとき我を人民と感じて軍や資本の階級や華族や皇族や天皇その他を反人民とする実感が日本にはひろく在った。今日それは風化してしまつたと見るか、厳然と生きていかか、人民詩精神の問題はそのことにかかわる。あの時代とは、デモクラシーを挟んで彼我对峙した時代であった。今日はすこしちがつて来ている。かつてと変らぬ、あるいはそれ以上の支配権力を發揮して、デモクラシーでさえも彼らのみがそれを守っている(成田の騒動に対する福田等の議会発言の如き)かのような言論と裁きの中に、人民詩精神というものは、これらの横すべりな状況の中で今こそ旺盛であらねばならない時だ。かつてのプロレタリア詩もその一つであろう。しかし、人民の詩は観念的な階級感覚を超えて、また政党主義を超えて、生活とともに在る

のでなければ文学の力を稀薄にするものであることは、すでに戦前戦後の永い歴史の中で実験的に経験された。もつともつと原初的な人間の喜怒哀楽にかえらねばならぬ。と同時にもつと現代の問題である科学と自我を同時に貫くものでなければならぬ。コスモスの詩はだから、深く個人であり、生活であり、政治であり、社会であり、ニヒルでアナキーであるときは厳然と組織的でなければならぬと同時に、花であり、うつくしい虫でもあらねばならない。われわれのとらえた森羅万象であらねばならない。

何に向つても詩人は民衆であるという考え方を私は「人民詩精神」ということの内容と考へたい。民衆を支配しつづけることを健康で正常で平和だと考へたり、その主張を守りつづける。その支配権力及びそれらの主張や思考と対立する民衆の詩精神を、人民詩精神と叫ぼうと私は考へつづけてきた。だから、かつての広義のプロレタリア詩は、その詩的特長において吾々のものであり、新しい表現を採求する態度も、明日を望むものとしてわれわれと共に行く者といわねばならない。敗戦の時に主張した「人民詩精神」を、民衆と権力との対立として考へる時、当時よりもつと芸術的文学的であるとともに階級の叫びとして拡大されるものであり、だからより新しい現実主義と壮大な理想主義を潜ませるものである。(秋山 清)

岡本潤追悼

で、感心したハナシではないことは知っているが、ともかくやることにした。そして今は同人会の外にいた友人たちにも、内規(かつて同人たりし者の同人復帰は本人の意志を同人会に申し出ればOK)にもとずいて復帰していっしょに詩を書こうじゃないかと声をかけたら向井孝、内田博の二人が再加入し、錦米次郎からも近く復帰という意志表示があった。またこの機会にいわゆる人民詩精神の仲間たちの来たり加わる者が次のようにあり、三月の同人会で確認された。

酒井よし江、小宮隆弘、近藤計三、和田英子、さかたしげし、寺島珠雄、菅沼瞭子、姜舜、

その他にも、近く同人会に報告しなければならぬ仲間がいる。新同人については今後にもその各人について紹介しなければならぬ。今回は原稿と同人費が編集部希望する以上に、日時不足の中にも集まって来た。作品や評論の出来ばえが十分とはいえないまでも、上向き姿勢を認めねばならない。前々号の後記に「コスモス」は大分前から慢性遅刊症、などと書かれていたが、今回だけのことから判断すると年四回発行すなわち季刊誌の態をなすことは不可能でなく見える。こん

後記

二月十六日にながらく病んでいた岡本潤が死んだ。一九四六年四月に「コスモス」が創刊された時の四人のうち二人(金子光晴と岡本潤)が死んだわけ。三年前金子が死んだときは「コスモス」は忘れたのでもあるまいが特にどうというほどのことを誌上に反映させなかったが、こんどはタイムリよく通巻58号を編集する時機だったので、木原、吉田二人の岡本潤論をはじめとしてコスモス雑記にも彼のことを幾人かがかき、小粒ながら作品にも追悼の思いをうたつたものが二、三あった。ついでにいっておけば『岡本潤全詩集』が近く出るようになっていく。それによって、大正から昭和に亘って活動し、前衛的な詩人からアナキスト、コムニストと変転しつつ詩歴のながかつた詩人岡本潤を考察するにはよき手懸りとなり得るだろうと思う。

「コスモス」を東京で編集することになってから七年、ずつと携わつた清水清が病気になる。これ以上彼に負担をかけることもできなくなり、私がふたたび同人に復帰して編集する、ということが東京同人会の意向ということで、たしかにこれは年寄の冷水(ひやみず)

(秋山)

コスモス 第19号 (通巻58号)

定価五〇〇円 千二二〇円

発行 一九七八年五月一日

編集人 秋山 清

発行所 東京都中野区上鷲宮五二一八八

コスモス社

電話 〇三九九八一—二九二五

印刷 (資) オカダ印刷

名古屋市中昭和区長戸町四一〇